

令和4年度 第2回学校運営協議会 議事録

- 1 日 時 令和4年6月15日(水) 午前9時30分から正午まで
- 2 出席者 玉木健治様(地域コーディネーター) 鍋田正明様(中村町自治会長)
大橋典子様(P T A会長) 望月映延様(J A組織広報部長)
望月雄司様(静岡市大里生涯学習センター長)
枝 賢一様(小糸製作所人事部企画課)
- 欠席者 本田道子様(ありんこの里管理者)
- 3 場 所 会議室

4 校長挨拶

コロナについて、静岡県はレベル1となった。2m離れていればマスクを外しても良いなど、活動の緩和も期待される中である。今、本校は調理実習や歯磨き指導ができておらず、子どもたちに心配な様子が見られている。ただ、高校では、まだ感染者が出ているため、今後どのように学校の教育活動が変わっていくのか懸念している。

また、物価の上昇など身近なところで実感する問題やヤングケアラーなどの社会問題もある。前回の運営協議会では、教員の多忙化が話題になったが、これらの問題にも真剣に対応を考えていなくてはならないと思っている。学校だけではできないことが多く、みなさんからの意見を伺って解決に向かっていきたい。

先日、「共感疲労」という言葉を本校職員に話をした。「共感疲労」は介護職や看護職がなりやすいと言われていたが、今はコロナやウクライナの戦争などのニュースから、誰にでも起こりうることと言われている。社会情勢にも目を向けながら子どもたちの様子をよく見ていきたい。

学校運営協議会は、それぞれの立場でざっくばらんに意見を出し合い、様々な課題に対する解決の糸口を見つけていける場となれば良いと思っている。

5 副校長より

目的に書いてあるとおり、学校運営協議会はみなさんと本校の課題を共有し、それぞれの立場から解決に向かう御意見をいただける場としたい。本日は来校者用アンケートも配付したので、参観の際には参考にしてほしい。

6 自己紹介

(玉木 様) 運動会を参観したが、子どもたちの人数が減ったことを改めて感じた。聴覚特支について、もっと外部にアピールしていかななくてはならないタイミングだと思う。

(大橋 様) 子どもが3歳から在籍し、現在中学2年である。保護者の立場でざっくばらんに意見を伝えたい。

(鍋田 様) 生徒さんと地元の住民とのふれあいがもう少し増えればと思っている。お互いを理解するためには「話すこと」からだと思っているので、そういった機会が今後増えたらと思っている。

(望月雄様) 生涯学習センターは、大里中に隣接している。地域の学校の協議会に参加することになったので、少しでもお役に立てればと思っている。

(枝 様) 今回初めての出席となる。小糸製作所は、自動車の照明器を製造している会社である。現在、聴覚障害の方が11名、製造の現場で勤務している。雇用する立場からの

意見を伝えたり、皆様からいろいろと教えていただいたりできればと思っている。
(望月映様) JAは複雑に組織化されていて、現在勤務している中央会は県内のJAの指導をしている。運営協議会について、まだ分かっていないところもあるが自分の立場で話ができたらと思っている。

7 説明・協議

玉木 様 授業参観の感想は、協議の中でお話をいただきたいと考えている。

(1) 交流について

【副校長より説明】

地域交流、学校間交流、居住地校交流の3種類がある。地域交流は、コロナの影響で十分できていないが、毎年5月に行っている奉仕活動をとおして地域の皆さまと一緒に活動させていただいている。学校間交流は、幼稚部から中学部までそれぞれ決まった園や学校と交流している。居住地校交流は子どもたちが住んでいる地域の学校教育活動に参加している。

子どもや保護者からの交流の感想については、資料3ページにまとめている。子どもからは、友達と筆談で話したことや友達の「あだ名」を覚えたことなどが嬉しかったこと。保護者からは、英語の聞き取りが厳しかったことや聞こえの厳しい環境で子ども自身は「分かった。」と言っていたものの、本当に聞こえていたのか不安に思ったなどの感想があった。

交流は、回数の制限があることや交流で得た成果が本校での学びに繋がられているかなどが課題である。

鍋田 様 副校長が説明した「子どもたちが経験を今後どのように交流に生かしていくのか」ということが大事だと思った。子どもたちがどういったスタンスで臨むかによって吸収できることが変わってくると思う。せっかく与えられた環境を十分に生かせないことがあるのではないかな。家庭で望まれたことなど、いろいろなことを背負って子どもが交流に参加する状況はないのかな。過剰な期待をせず、ハードルを下げれば良いのではないかな。

玉木 様 子どもたちは、地域防災への参加はどのような状況なのか。

鍋田 様 地域防災は、小学生は蚊帳の外になってしまっているところがある。中学生は怪我をした地域住民に付き添う訓練をしている。

玉木 様 もし、災害が起きたとき、子どもたちが地域の力になれるようにしていくことは大切なのではないかなと思う。コロナも収まってきたら一緒に交流できることもあるのではないかな。

鍋田 様 夏祭りなどを一緒にやっていたこともあったが、今は無くなってしまい、難しさもある。

望月雄様 一人で慣れない学校に参加することは大変なのかなと思ったが、楽しめている様子が分かった。それは子どもがもっている能力なのかなと思う。回数的には3つの交流を合わせると適切なのではないかな。ただ今後のことを考えると、オンラインを活用していくことも大切なのではないかな。

玉木 様 一人一台端末を子どもが持っているようだが、今度ネットで繋がっていくことは可能なのかな。

副校長 今は、個々に繋げてオンライン交流は行っておらず、教員が設定している。今年度、沼津聴覚と本校小学部が合同で修学旅行を行うことになっているためオンラインで学習した。また、昨年度は大橋くんが韓国の生徒と交流をもった。

玉木 様 オンライン交流は、対面で緊張してしまう子でもできる方法であり、時代に合っているのではないかな。計画的に活用していけると良い。

- 大橋 様 子どもの性格で交流の場に入れる子、なかなか入れない子がいると思う。私の子は小さい頃から交流をしているので、顔馴染みになって、何も言わなくてもロジャーを相手校の子どもたちが使ってくれる。
- 他のお母さんから聞いた話だが、交流先で引率の教員がキューサインで通訳をしてしまい、引率教員の方ばかり見てしまうことがあるとのことだった。子ども同士の自然と起きる人間関係を期待したいが、回数が少なくお客さん扱いになってしまうこともある。席替えや配付プリントを後ろの席の子に回す経験など、この学校では体験できないことを交流の場で知る良い機会となっている。
- 玉木 様 私がこの学校に勤めていた時に、受け入れ校の交流への温度差を感じていた。交流回数はある程度規制があるのか。
- 校 長 本校の授業や日程調整、相手校のこともあるので、なかなか回数を増やすということは難しい。
- 赤堀教諭 引率が必要なため、学校に残っている子どもたちの授業のこともあり、回数が増えていくと調整が厳しい。
- 玉木 様 引率をしなくてはならないのか。
- 副 校 長 県が作成している居住地校交流のガイドブックには、引率が必要とされている。
- 大橋 様 私の子の交流校は快く受け入れをしてくれている。小学校の時は運動会に行ったり、卒業式では卒業証書を用意してくれたりもした。保護者として交流と一緒に付いていくことで、子どもたちの間で流行っているものが分かったり、同年代の子どもたちの様子を知ったりすることができるので、良いと感じている。
- 校 長 受け入れについては、地域の方々への啓蒙が必要であり、自分の地域に住む障害をもった子どもたちについて理解していただけると嬉しいが、学校だけが行うものではないと思っている。
- 玉木 様 小さい頃からの積み上げが大事だと思う。大橋さんが、御自身の経験を交流の良い事例として保護者の皆さんに話していただけると良いと思う。
- 大橋 様 地域の防災訓練はどうなっているのか。
- 大橋 様 地元の中学生は、参加したら判をもらってくることになっているので、参加している。ただ、小学生はそこまではしない。小学生の時に子どもと一緒に参加したことがある。
- 副 校 長 以前、鍋田様と本校の子どもたちと地域との交流活動についてお話した時に、清掃活動のことが話題になったと思う。地域で必要なときに声を掛けていただくと、良い交流の場となると思う。
- 鍋田 様 清掃活動に限らず、みんなでできることを考えていければと思う。
- 玉木 様 学習で地域に出ていくことはあるのか。
- 赤堀教諭 コロナ禍で校外学習自体が難しくなったことがあるが、田んぼの様子を見たり、地域を歩いたりすることはある。近くの交番がなくなるなど、なかなか地域の方と学ぶ機会が減ってしまった。
- 玉木 様 昔の話であるが、緊急時の対応として、携帯電話も今ほど普及していなかったので、地域の方にFAXを借りるようお願いをする学習を行ったことがある。地域に出て、子どもたちが話をする機会を意図的に作っていくことも大事ではないか。

(2) 進路指導について

【副校長より説明】

本校は中学部までしかなく、以前は沼津聴覚の高等部に進学することが多かった。平成13年度から昨年度までの卒業生の卒業後の進路として資料にまとめている。通級指導教室に在籍し

た子どもたちについても同様に資料にまとめた。

大学進学者も最近は増えている。就職は様々な企業にお世話になっており、小糸製作所様にはたくさん卒業生がお世話になっている。通級生については、比較的聴力が良いお子さんが多いため、地域の小中学校に通っている。進学については、大学および専門学校などが挙がっているが、十分に進路が追えていないところもある。今後、データを積み上げ、自分たちの教育が社会での子どもたちの活躍に繋がっているのかを検証していきたい。

玉木 様 学校経営書をいただいたので、キャリア教育や特別支援学校のセンター的機能などの取り組みについて、校長先生からお話をいただきたい。

校 長 本校の今年度の重点目標はゴシック体で書いてある。この重点目標の達成のため、委員会を立ち上げた。その中の1つとして、「自分の命を守る防犯及び防災等安全教育の充実」を挙げている。聴覚障害者の視点で地域の活動参加や自分の命を守るための行動について力を入れて取り組んでいく。また、「子どもが対話的、協同的に学ぶ授業実践」については、当たり前なことだが聴覚障害の特性をふまえて授業展開をしていく。でも、しっかりとした学力を身に付けられるように進めている。今、話題になった「キャリア教育の視点での幼小中学部の進路学習、進路指導の充実」は、昨年度の反省で、本校が中学部までしかないことでキャリア教育が弱いところがあった。卒業後の子どもたちにどのような力が必要なのかという視点が本校ではまだ弱いため、企業の皆様にぜひ教えていただきたい。通級指導教室では在籍校との連携を大切に取り組んでいるが、通級生の在籍校に限らず、特別支援教育コーディネーターを中心に、地域の学校への支援を進めているところである。

玉木 様 子どもたちは、将来の自立、または自分なりの生きがいをもって生きていくことが目標になると思うが、企業の立場でどんな力が必要だとお考えなのか。

望月映様 キャリア教育とはどんなことを指すのか。

校 長 簡単に言うと、自分の生き方を考える教育である。その中には自分の進路を考えることも含まれる。

望月映様 中学生までなのであまり構えて進路について考えていなくても良いのではないかと思った。ただ、障害がある方の進路については、厳しさがあることは承知している。先程、大橋委員から話があったが、「自分のことについて気付いていくこと」が大切ではないかと思った。交流をとおして、騒がしい中でもいろいろとやれることがあると気付くこと、自分はやっぱり人と交わることが苦手であると気付くことなど、この学校が中学生までだと考えるとそれで良いのではないか。仕事については全部一人が負わなくても良い時代になっている。任せられることが何なのか自分にできることが何なのかを相談していけば良いと思う。PCの操作については、触ることができてもエクセルやワードなどを使いこなすことは難しいということもある。今のうちから、遊びながら使い方の1つとして触れていけると良いのではないかと思う。

玉木 様 今の子どもたちのPCの扱いの様子はどうなのか。

校 長 結構、子どもたちは使い慣れているようだ。NHKの番組で見たが、肢体不自由の方がオリヒメというロボットを遠隔で操作して職に生かしている様子が紹介されていた。

大橋 様 県立総合病院でのセミナーに参加したとき、オンラインでの聞き取りの厳しさが話題になっていた。仕事ではなく今の学校段階で気軽に友達とオンラインでの交流を体験することでオンラインの聞こえの厳しさがあることを知るなど、馴れていってほしい。

- 玉木 様 働くために、学校で今子どもたちに培っておくべきことを皆様から教えていただきたい。
- 枝 様 コミュニケーションが課題になっている。会社としてサポートをしているが、多くの聴覚障害者の方が自分からコミュニケーションを取ることが難しいようだ。自分から積極的にコミュニケーションを取ろうとする力を今から育てていけると良い。最近の若者の傾向として国語力が落ちていることの指摘がある。SNSに慣れた分、短文で済ませたり、主語や述語が抜けてしまったりするようだ。内輪では分かっても他で通じない文章になってしまい、結局考えが伝わらなくなってしまっている。手書きをすると、後で直すことが手間になるので、最初から考えて文を書くようになる。時代に逆行するものの、今必要な力だと感じている。
- 玉木 様 何年か前に小糸製作所様に聴覚障害者の働く様子を見に行かせていただいた。職場の働き方改革の提案を文で書くことが苦手な様子が見られた。また、画面での指示から読み取って仕事をするのも苦手なようだった。なぜ国語力が大事なのが分かった。校内参観の様子だと、だいぶ授業で作文を書かせているようだが、考えて書くことは大事だと思う。
- 副校長様 実際にコミュニケーションはどのように取っているのか教えてほしい。
- 枝 様 朝礼では、本日の仕事についてや、前日までに起きたトラブルの報告などを口頭で行っている。聴覚障害者には、朝礼後にノートなどで筆談をして説明している。マスクを外していれば口頭で理解できることもあったが、現在は口形が分からず苦勞しているようだ。タブレットを活用することも検討したが、作業中の置き場がなく筆談が今のところ最良である。
- 副校長様 筆談が多いとのことだが、要点を絞って書くことが苦手であるため、仕事の現場ではそれがハンデになることがあると思う。
- 校長様 箇条書きや要点を絞って書くことなどの指導が必要である。
- 玉木 様 小・中学部からやるべきだと思う。絵画コンクールなどへ参加して、他の子どもたちと競うことも良い経験になるのではないかと思う。補聴機器が今後より改良されていると思われる。在籍者が少なくなっても聴覚教育は必要だと思うし、センター的機能をより働かせて、聴覚障害をもった子がより社会に参加しやすい学校になっていけばと思う。
- 枝 様 人工内耳装用者を現場実習で受け入れたことがあったが、電波やノイズなどの周辺機器への影響などについて知りたい。
- 副校長様 人工内耳については地域支援部から情報提供をさせていただきたい。
- 玉木 様 補聴機器をどういった環境で使いこなせるか、どういう環境だと難しいのか理解していただくことは大事だと思う。
- 副校長様 自分たちで補聴機器について説明する力も必要だと思う。
- 望月映様 聴覚障害の方が減っているようだが、少子化の影響なのか、聴覚障害者が減っているのか、どちらなのか。
- 副校長様 補聴機器の進歩、インクルーシブ教育の充実から、通常の小・中学校に出る方が増えていることが一番の原因だと思う。
- 校長様 聴覚は減っているものの、知的障害の子どもは増えている。
- 副校長様 特に高等部が増えている。以前なら普通高で学んでいた方が、知的特支を選択するようになっている。
- 大橋 様 お母さん同士の交流が増えたら嬉しい。通級生の保護者との交流も含めてお互いに相談できると有難い。
- 副校長様 P T Aの取り組みとして、今後一緒に考えていけると良い。

8 事務連絡など

【副校長より】

ここでいただいた意見は本校職員と共有していきたい。

次回の学校運営協議会は、8月1日（月）の9時半からお願いしたい。